

『伊勢物語』と万葉類歌―『伊勢物語』の中の上代―

有馬 菜月

一 はじめに

平安朝初期の歌物語とされる『伊勢物語』は、平安朝文学の中で論じられることが多い。しかしながら、『伊勢物語』には万葉類歌が収載され、上代語も見受けられるといったことから、単に平安朝文学として位置付けて語ることができない。では、『伊勢物語』には「上代」がどれほど関係しているのだろうか。このような『伊勢物語』と上代とのつながりに焦点を合わせた時に、まずは『伊勢物語』の中に詠み込まれている万葉類歌を取り上げて検討を加えたい。そして、そのことを通して『伊勢物語』成立当時の言語文化環境を明らかにし、『伊勢物語』のテキスト生成における言語文化状況に「上代」がどれほど関係してくるのかを示そうと思う。

二 『伊勢物語』の語彙調査

ところで、「万葉類歌」と呼ばれる歌には、『万葉集』時代の派生歌が伝承歌として後代に流伝したもの、また、後代に「万葉調」を模倣して作られたものなどが含まれる。そこで、『伊勢物語』中の万葉類歌がどのような位相にあるものなのかを確かめるために、予備調査として『伊勢物語』の語彙調査を行った*1。物語本文、あるいは和歌に、上代から使用されている語彙がどれほど存在しているのか、ま

た一方で、『伊勢物語』が初出の語彙はどれほどあるのか、結果は以下の通りである。

	上代語彙	動詞	形容詞	形容動詞	名詞	副詞	感動詞
『伊勢物語』 初出の語彙	八七例	二三三例	五〇例	一二例	三三〇例	二六例	三例
	二六例						
	一三例						
	一六八例						
	一六例						
	一例						
							七例

- ・ 上代語彙 ― 計六五一例
- ・ 『伊勢物語』初出の語彙 ― 計三一一例

この調査結果から、『伊勢物語』には上代から使用されている語彙が全体の三分の二近く存在することがわかる。また、その中には、上代特有の活用をする動詞であったり、平安朝以降で意味用法が変化するものが存在する。

例えば、へきのふけふ雲の立ち舞ひかくろふは花の林を憂しとなりけり(第六十七段)の「かくろふ」*2やへ目離るとも思ほえなくに忘

らるる時しなればおもかげに立つ（第四十六段）の「わする」*3という動詞に関して、上代から平安朝に移っていく過程で活用が徐々に四段活用から下二段活用へと変化していったものである。『伊勢物語』に現れるこれらの単語はすべて上代的な活用のまま残っている。また、^レ白露は消なば消なん消えずとて玉にぬくべき人もあらじを（第五段）の「消（く）」*4に関しては、この第五段の和歌の中に上代的な活用と、その活用が消失した後 generally 用いられ始める活用の両方が現れている。それに加え、^レつれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし（第七段）の「ひつ」*5は、平安朝以降で用いられはじめる活用方法で表現されているという点からは、単に上代とのつながりのみを示しているわけではなく、そこから『伊勢物語』以降の作品への連関も見えてくる。さらに、上代から平安朝に移る過程で意味の変化が見られる単語に関して、例えば、第十六段の本文、「ねむごろに相かたらひける友だちのもとに」に用いられる「かたらふ」*6は、『日本国語大辞典』によると、平安朝以降に用いられやすくなる「親しく交際する。」という意で使用されている。しかし、「ねむごろに相」はそれだけで「親しく」「一緒に」という意味を表している。つまり「ねむごろに相かたらひける」という文脈は、『日本国語大辞典』に従うと意味が重複してしまうことになる。よって、ここで用いられる「かたらふ」は上代的な意味用法である「語り続ける・繰り返し話をする」という意味で用いられていると判断することができ。同じく、^レ名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（第九段）の「こととふ」*7も、『日本国語大辞典』によると「たずねる。質問する。」の意の用例として挙げられている。しかし、上代的な意味解釈である、「ものをいう。口をきく。」という意でも『万葉集』の用例、^レこととはぬ物にはあれど吾妹子が入りにし山を

よすかとぞ思ふ（四八二）の「こととはぬ」対象が「山」であることに注目すれば、『伊勢物語』の「こととはむ」の対象が「都鳥」と考へることもでき、そうすることで都に残してきた妻を思い、「さあ、口をきいておくれよ」と、都鳥に妻の様子を催促する男の心の働きがよく現れるのである。また、『伊勢物語』に現れる「ほど」*8に関しては特徴的で、各章段に現れる「ほど」*8は、^レ忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで（第十一章）をのぞき、章段の本文と百十三段の和歌に見られる例はすべて上代で用いられていた時間的な程度を表している。例えば、第四段の本文「心ざし深かりける人行きとぶらひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、他に隠れにけり」や、第二百十段の本文「むかし、男、女のまだ世経ずとおぼえたるが、人のもとに忍びてもの聞えてのち、ほど経て、」などがその例である。このように、上代で専ら表現されていた時間的程度としての意味と、奈良末・平安初期から現れる空間的程度を指す意の単語として、その両方が『伊勢物語』中に用いられている点からは、『伊勢物語』が上代から平安朝以降にかけての橋渡しの位置に在ることがわかる。

以上、『伊勢物語』に用いられる語彙の活用や意味上の変化を見てきた。なかでも、その多くを上代語が占める点からは、『伊勢物語』と上代との語彙的側面におけるつながりが非常に深いことがわかる。特に、『伊勢物語』に現れる上代語が和歌だけでなく地の文にも多く現れている点は注目される。このことから、『伊勢物語』に収載される万葉類歌は、上代の言語慣習が根強く残る言語環境の中で生まれ、受容されたものと考えることができる。

三 『伊勢物語』と万葉類歌の先行研究

『伊勢物語』の万葉類歌については、渡辺泰宏氏が昭和以降の諸説を端的にまとめたものがある*9。ここでは以下四人の論が取り上げられている。

まず、池田亀鑑氏は、『伊勢物語』中の万葉類歌のうち、『拾遺集』・『古今和歌六帖』のほうが『万葉集』に近いことを問題とし、『伊勢物語』中の万葉類歌が、『拾遺集』・『古今和歌六帖』に類歌があるものばかりではないことから、「伊勢物語と拾遺集・古今和歌六帖とは、それぞれ別々に万葉類歌を採り入れた」*10としている。

次に、福田良輔氏は、『伊勢物語』における万葉類歌が、『万葉集』に多くの類歌を持つことから、「それは直接万葉集から採り入れられたものではなく、当時の人々に伝承されていた民謡的な口承歌」*11だとしている。

また、金井清一氏は、「伊勢物語の万葉類歌の多くは口承歌であり、ただ、「君があたり（第二十三段）」「岩根ふみ（第七十四段）」の歌は万葉集を訓読して採り入れられたもの」*12だとし、「万葉集では、「蒙」は「隠す」の意はあっても、「たなびく」と訓ぜられるべき。したがって、伊勢物語の「君があたり見つつををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも」では、万葉集の原文を字義にしたがって訓じたため結果である」*13としている。

そして、針本正行氏は、「伊勢物語二十三段において、万葉集類歌である三〇三二番の歌「君があたり見つつををらむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも」を採り入れ、その直前の万葉歌を用いて伊勢物語の「君来むと」と創作した」*14と述べている。

このように、『伊勢物語』の万葉類歌の典拠や採歌方法の議論は、『万葉集』から直接に採ったり加工創作したりしたものか、あるいは

口承的なものからの採歌か、の二つに分かれている。渡辺氏は、これらの先行研究を踏まえ、『伊勢物語』における万葉類歌の問題として、

①典拠——万葉集、またはそれを訓読したものを基にしつつも、伊勢物語作者、または編者が改作し、取り入れたものか、

それとも、万葉類歌に近似する歌が当時伝えられていて、伊勢物語がそれをそのまま採り入れたのか。

②なぜ、どういう場面で、万葉集を取り入れたのか。

の二点を示している。

さて、本稿では、こうした典拠、採歌場面、利用方法に関する問題には立ち入らず、『伊勢物語』の万葉類歌が『万葉集』歌とどのような関係にあるものなのかを分析する。そして、『伊勢物語』の万葉類歌が『万葉集』および「万葉類歌」一般の中でいかなる位置にあるものなのかを考察し、『伊勢物語』成立の環境としてあった言語文化状況について検証を試みることにする。

四 『伊勢物語』の中の万葉類歌の検討

『伊勢物語』の万葉類歌の認定については諸説ある。先の渡辺氏の論文では、定家本『伊勢物語』に見る万葉類歌を、四つのもの*15に基づいて認定している。今回扱うものもこれに依ることとする*16が、そこに新たに四首の歌を『伊勢物語』の万葉類歌と認定し、検討対象として加えることとした。今回扱う二十一首を以下に示す。また、新たに認定した四首は11番〜14番である。

1、武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり（12段）

於毛思路伎 野乎婆奈夜吉曾 布流久左尔 仁比久佐麻自利 於非波於布流我尔

（おもしろき野をばな焼きそ古草に新草交じり生ひば生ふるがに）

〔万葉集〕卷十四・三四五二・作者未詳

2、中／＼に恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり（14段）

中中二 人跡不在者 桑子尔毛 成益物乎 玉之緒許
（なかなか人にあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり）

〔万葉集〕卷十二・三〇八六・作者未詳

3、人はいき思ひやすらん玉かづら面影にのみいと見えつゝ（21段）

人者縦 念息登母 玉纒影尔所見乍 不所忘鴨
（人はいき思ひやすらん玉かづら面影にのみいと見えつゝ）

〔万葉集〕卷一・一四九・倭太后

4、風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん（23段）

海底 奥津白浪 立田山 何時鹿越奈武 妹之当見武
（海の底沖つ白浪竜田山いつか超えなむ妹があたり見む）

〔万葉集〕卷一・八三・古歌・作者未詳

可是布気婆 於吉都思良奈美 可之故美等 能許能等麻里尔 安麻多欲曾
奴流

（風吹けば沖つ白波恐みと能許の亭にあまた夜そ寝る）

〔万葉集〕卷十五・三六七三・作者未詳

5、君があたり見つゝを居らん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも（23段）

君之当 見乍母将居 伊駒山 雲莫蒙 雨者雖霽
（君があたり見つゝを居らん生駒山雲なたなひき雨は降るとも）

〔万葉集〕卷十二・三〇三二・作者未詳

6、梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにし物を（24段）

梓弓 末乃多頭吉波 雖不知 心者君尔 因之物乎
（梓弓末のたつきは知らねども心は君に寄りにしものを）

〔万葉集〕卷十二・二九八五一本歌伝・作者未詳

梓弓 引見緩見 思見而 既心齒 因尔思物乎
（梓弓引きみ緩へみ思ひ見てすでに心は寄りにしものを）

〔万葉集〕卷十二・二九八六・作者未詳

7、蘆辺より満ちくる潮のいやましに君に心を思ひます哉（33段）

從蘆辺 満来塩乃 弥益荷 念歎君之 忘金鶴
（蘆辺より満ち来る潮のいやましに思へか君が忘れかねつる）

〔万葉集〕卷四・六一七・山口女王

8、玉の緒をあはおによりて結べれは絶えての後も逢はむとぞ思（35段）

玉緒乎 沫緒二搓而 結有者 在手後二毛 不相在目八方
（玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめやも）

〔万葉集〕卷四・七六三・紀郎女

9、谷せばみ峰まで延へる玉かづら絶えむと人にわが思はなくに（36段）

多尔世婆美 弥年尔波比多流 多麻可豆良 多延武能己許呂 和我母波奈
久尔

〔万葉集〕卷十四・三五〇七・作者未詳

10、ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思ふ（37段）

二為而 結之紐乎 一為而 吾者解不見 直相及者

(二人して結びし紐をひとりして我は解き見じ直に逢ふまでは)

『万葉集』卷十二・二九一九・作者未詳

11、君により思ならひぬ世中の人はこれをや恋といふらん(38段)

故敷等伊布波 衣毛名豆気多理 伊布須敏能 多豆伎母奈吉 安賀未奈里
家利

恋ふといふはえも名付けたり言ふ為方のたづきも無きは我が身なりけり

『万葉集』卷十八・四〇七八・大伴宿祢家持

12、行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり(50段)

行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

『古今集』卷第十一・恋歌一・五二二・よみ人しらず

水上 如数書 吾命 妹相 受日鶴鴨

(水の上に数書くごとき我が命妹に逢はむとうけひつるかも)

『万葉集』卷第十一・寄物陳思・二四三三・作者未詳

13、わがうへに露ぞをくなる天の河門わたる舟の櫂のしづくか(59段)

わが上に露ぞをくなる天の河門渡る舟の櫂のしづくか

『古今集』卷第十七・雑歌上・八六三・よみ人しらず

此夕 零来雨者 男星之 早滂船之 賀伊乃散鴨

(この夕降りくる雨は彗星のはや漕ぐ船の櫂の散りかも)

『万葉集』卷第十・秋雑歌・七夕・二〇五二・作者未詳

14、さむしろに衣かたしきこよひもや恋しき人にあはでのみ寝む(63段)

さむしろに衣かたしき今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫

『古今集』卷第十四・恋歌四・六八九・よみ人しらず

吾恋 妹相佐受 玉浦丹 衣片敷 一鴨将寐

(我が恋ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷ひとりかも寝む)

『万葉集』卷第九・一六九二・作者未詳

15、ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに(71段)

千葉破 神之伊垣毛 可越 今者吾名之 惜無
(ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今はわが名の惜しげくもなし)

『万葉集』卷十一・二六六三・作者未詳

16、目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける(73段)

目二破見而 手二破不所取 月内之 楓如 妹乎奈何責
(目には見て手には取らぬ月の内の楓のごとき妹をいかにせむ)

『万葉集』卷四・六三二・湯原王

17、岩根ふみ重なる山にあらねども逢はぬ日おほく恋ひわたる哉(74段)

石根踏 重成山 雖不有 不相日数 恋度鴨
(岩根踏む重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ恋ひわたるかも)

『万葉集』卷十一・二四二二・人麻呂歌集

18、蘆の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もさず来にけり(87段)

然之海人者 軍布蒭塩焼 無暇 髮梳乃小櫛 取毛不見久
(志賀の海女はめ刈り塩焼き暇なみくしらの小櫛取りも見なくに)

『万葉集』卷三・二七八・石川小郎

19、人知れず我恋ひ死なばあぢきなくいつれの神になき名おほせむ(89段)

和伎毛古尔 安我古非思奈婆 曾和敏可毛 加未尔於保世牟 己許呂思良
受互
(我妹子に我が恋ひ死なばそわかも神に負ほせむ心知らずて)

『万葉集』卷十四・三五六六・作者未詳

20、須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり (112段)

之加乃白水郎之 焼塩煙 風乎疾 立者不上 山尔軽引

(志賀の海人の塩焼く煙風を疾み立ちは上らず山にたなびく)

『万葉集』巻七・一二四六・古集・作者未詳

21、浪間より見ゆる小島の浜ひさし久しくなりぬ君にあひ見で (116段)

浪間從 所見小嶋之 浜久木 久成奴 君尔不相四手

(波の間ゆ見ゆる小島の浜久木久しくなりぬ君に逢はずして)

『万葉集』巻十一・二七五三・作者未詳

*波線部は、『伊勢物語』万葉類歌と『万葉集』歌との相違箇所。以下同。

総計二十一首 (『伊勢物語』所載歌全二〇七首中) におよぶ『伊勢物語』の万葉類歌は次の三つに分類できる。

I 同類・同想歌・・・9・10・18・17・21・16・11・13・14

II 上代修辭法を繼承・展開させた歌・・・4・1・12

III 万葉集との対話・変奏歌・・・5・7・15・19・2・6・20・8・3

I 同類・同想歌

ここに分類したのは、『万葉集』歌とほぼ同じ語句が使用され、内容・モチーフにも相違のない万葉類歌である。これについては、その下位分類として、さらに細かく以下のA、B、Cの三群に分類することができる。

A 言葉も内容もほぼ同じものであり、『万葉集』歌的な発想を、ほぼ直接的に取り入れたもの。(9番・10番・18番)

B 『万葉集』で用いられていた上代語を、意味内容はそのままに、その当時の現代語に変換して表現しており、かつ、同様の思いを詠んでいるもの。(17番・21番・16番)

C 一見すると全く異なる歌に見えながらも、いくつ共通するキーワードによって一首が構成され、その結果、詠歌内容も同想のものとなつていているもの。(11番・13番・14番)

まず、「A 言葉も内容もほぼ同じものであり、『万葉集』歌的な発想を、ほぼ直接的に取り入れたもの」について、18番を取り上げる。

18

蘆の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もさへず来にけり (87段)

然之海人者 軍布苅塩焼 無暇 髮梳乃小櫛 取毛不見久

(志賀の海女はめ刈り塩焼き暇なみくしらの小櫛取りも見なくに)

『万葉集』巻三・二七八・石川小郎

『万葉集』では、「志賀」(琵琶湖近辺)で詠まれた歌だが、『伊勢物語』では「蘆の屋の灘」(摂津国)の歌とし、別の地名に変えて、その土地を紹介するために、「むかしの歌」に詠み込んでいる。語句の違いはあるものの、両者ともに、その土地で「仕事をこなす海女は、休む暇もないので、髪をとぐ暇も、櫛を手取る暇さえない」という同内容の歌である。

続いて「B 『万葉集』で用いられていた上代語を、意味内容はそのままに、その当時の現代語に変換して表現しており、かつ、同様の思いを詠んでいるもの」に分類されるもののうち、17番を取り上げる。

岩根ふみ重なる山にあらねども逢はぬ日おほく恋ひわたる哉(74段)

石根踏 重成山 雖不有 不相日数 态度鴨

(岩根踏む重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ恋ひわたるかも)

『万葉集』卷十一・二四三二・人麻呂歌集

ここでは、『万葉集』で用いられている上代語が『伊勢物語』では、意味上の変化はなしに、当時の現代語的なものに変換されている。一つに、『万葉集』の「恋ひわたるかも」が『伊勢物語』では「恋ひわたる哉」となっており、形容詞についても、『万葉集』で「まねみ」となっているところが、『伊勢物語』では「おほく」とされている*17。

両者で詠まれた際のシチュエーションは異なるものの、詠まれている内容というのは、逢えないわけではないのに逢うことができいない、そのような状況に「恋しく思い続けている」という心である。

最後に、「C 一見すると全く異なる歌に見えながらも、いくつかの共通するキーワードによって一首が構成され、その結果、詠歌内容も同想のものとなっているもの」に分類されるもののうち、13番を取り上げる。

わがうへに露ぞをくなる天の河門わたる舟の櫂のしづくか(59段)
わが上に露ぞをくなる天の河門渡る舟の櫂のしづくか

『古今集』卷第十七・雑歌上・八六三・よみ人しらず

此夕 零来雨者 男星之 早滂船之 賀伊乃散鴨

(この夕降りくる雨は彗星のはや漕ぐ船の櫂の散りかも)

『万葉集』卷第十・秋雑歌・七夕・二〇五・作者未詳

『伊勢物語』と『古今集』に語句の異同はない。

『万葉集』と『伊勢物語』で共通する語句は「船の櫂」のみである。したがって両者は、一見すると全く異なる内容の歌に見えてしまう。しかし、『万葉集』の「彗星」は『伊勢物語』の「天の河」に対応し、「散り」は「零」に同義である。さらに、「(降り来る)雨」と「(わが上に置く)露」も状況としては近似する。こう考えると、これらのような、表面的には異なる語句でありながら、ほぼ同義であるものがキーワードとなって、詠まれている内容は重なってくる。

以上が、「I同類・同想歌」に分類されるものの例であった。

ところで、『伊勢物語』での万葉類歌の扱いに注目してみたとき、先に述べたA群の18番、C群の13番は興味深いものとなっている。

18番の歌では、『万葉集』歌の地名を別の地名に詠みかえ、それを「むかしの歌」として紹介している。

『伊勢物語』第八十七段

むかし、おとこ、津の国、むばらの郡、芦屋の里にしるよしして、
いきて住みけり。

むかしの歌に、

蘆の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もさいず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。こゝをなむ芦屋の灘とはいひける。(省略)

ここでは、『万葉集』の地名を他の地名と入れ替えて伝承されている歌が「むかしの歌」として語られる世界と『伊勢物語』とがつながっていることが確かめられるのである。

また、13番では、『万葉集』歌が「七夕」を詠んだ歌であり、「この夕」が表すように、彦星と織女が年に一度の逢瀬を果たそうとする時である。もちろん、詠歌主体はそのような彦星・織女と自分たちの逢瀬を重ね合わせながら詠んでいるはずである。しかしながら、『古今集』では、この万葉類歌が「恋歌」ではなく「雑歌」として、そして『伊勢物語』では「男が蘇生した時の歌」として収められている。

『伊勢物語』第五十九段

むかし、おとこ、京をいかゞ思ひけん、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかぎりと山里に身をかくすべき宿求めてん

かくて、物いたく病みて、死に入りたりければ、おもてに水そゝ

きなどして、いき

出でて、

わがうへに露ぞをくなる天の河門わたる舟の櫂のしづくか

となむいひて、いき出でたりける。

つまり、『伊勢物語』では一首の形をそのままに、異なるシチュエーションで半ば言語遊戯的に万葉類歌を利用した事例だといえることができる。このことは、『万葉集』がなお言語文化環境のなかに息づき、日常的に、あるいは当意即妙に万葉類歌が詠み出される世界があり、『伊勢物語』がそうした言語文化状況において生成、成立した事情を伝える。

これらのように、『伊勢物語』中の万葉類歌は、18番のように詠み継がれ思い起こされる伝承歌として、あるいは13番のように日常的に利用されるものとしてあり、このことは、『伊勢物語』がそうした上代以来の言語文化環境のなかで成立したことを考えさせる。

II 上代修辞法を継承・展開した歌

II に分類したのは、修辞技巧やその他の語句に万葉的なものを用いながら、内容は引き継いでいないもの、つまり、詠まれる内容は万葉歌と異なっているもの、あるいは『古今集』の内容に近いというもので、4番、1番、12番の三事例がこれに該当する。ここでは、12番のものを取り上げる。

12

行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり (50段)

行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

『古今集』・卷第十一・恋歌一・五三二・よみ人しらず

水上 如数書 吾命 妹相 受日鶴鴨

(水の上に数書くこととき我が命妹に逢はむとけひつるかも)

『万葉集』・卷第十一・寄物陳思・二四三三・作者未詳

『伊勢物語』と『古今集』に異同はない。

『万葉集』歌で用いられている「水の上に数書く」という表現は、「はかなさ」を強調するための譬喩として用いられている。このことは『伊勢物語』歌(『古今集』歌)も同様である。しかし、『万葉集』歌が「はかない」としている対象は「わが命」であり、『伊勢物語』歌(『古今集』歌)が「はかない」としているのは「思はぬ人を思ふ」という、恋情の「はかなさ」である。

『古今集』恋歌部一には、こうした恋愛初期における報われない恋情の「はかなさ」が数多く詠まれている。

『古今集』恋歌一

519 しのぶればくるしき物を人しれず思ふてふこと誰にかたらむ

よみひとしらず

- 520 来む世にも早なりなん目のまへにつれなき人を昔とおもはむ
 521 つれもなき人を恋ふとて山びこのこたへするまでなげきつる哉
 522 行く水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり
 523 人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだに知られざるらむ
 524 思ひやる境はるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき
 525 夢のうちにあひ見むことを頼みつゝ暮らせるよめは寝む方もなし
 紀友則
 561 夜ゐの間もはかなく見ゆる夏虫にまどひまされるこ恋もする哉
 562 夕されば蛍より異にもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき
 壬生忠岑
 566 かきくらし降る白雪のしたぎえにきえて物思ふころにもあるかな

これらは『古今集』の恋歌部「一」に収載されているように、すべて恋の初め、恋がまだ成就していない時に詠まれた歌である。この万葉類歌を収める『伊勢物語』本文では、男女それぞれが相手への不信を歌う様子が語られ、それを「あだくらべかたみにしける男女」と解説している。ここにいう「あだくらべ」が示すように、『伊勢物語』の万葉類歌である「行く水に」歌は、互いに相手を疑って自分の思いがうまく伝わらない空虚感を表現したものである。『古今集』恋歌一の「恋がまだ成就していない段階での心の空白感」などを詠じた歌群に配置されていることを参考にすれば、この『万葉集』以来の譬喩を用いた万葉類歌は、詠歌内容の面においては『万葉集』より『古今集』に近いものだと言える。

先の「I同類・同想歌」とは異なる様相をもつこれらの万葉類歌もまた、『伊勢物語』の万葉類歌群の一つの形としてあったのである。

III 万葉歌との対話・変奏歌

IIIに分類したのは、『万葉集』歌の享受の過程でその詠歌内容の言語化、再表現、拡充、展開開拓を図っている万葉類歌であり、さらに次の四群に分類できる。

- A 『万葉集』歌に含意されていた詠歌内容を一部の語句を改変して言語化し、顕在化させた万葉類歌。(5番・7番・15番)
 A' 『万葉集』歌の詠歌内容を新たな語彙を用いて言明し、再表現を図る万葉類歌。(19番・2番)
 B 新たな表現を加えることで『万葉集』歌にない新たな表現内容を生みだしている万葉類歌。(6番・20番)
 C 『万葉集』歌の表現内容を充分理解した上で、歌の一部を改訂して、より深い叙情の開拓を図っている万葉類歌。(8番・3番)

まず、「A 『万葉集』歌に含意されていた詠歌内容を一部の語句を改変して言語化し、顕在化させたもの」に分類されるもののうち、5番を取り上げる。

- 5 君があたり見つゝを居らん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも(23段)
 君之当 見乍母将居 伊駒山 雲莫蒙 雨者雖零
 (君があたり見つゝも居らむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも)
 『万葉集』卷十二・三〇三二・作者未詳

『万葉集』歌で「雲なたなびき」となっているところが、『伊勢物語』歌では「雲なかくしそ」となっているところに注目する。『万葉

『集』歌では、「生駒山に雲がかかってほしくない」と歌いつつ、そこに「あなたを偲ぶよすがである生駒山を隠してほしくない」という思いが含蓄されている。それを、『伊勢物語』歌は「雲なかくしそ」と直接的に表現している。これは、『万葉集』歌の詠者が心の内に秘めていた思いをあらわに表現したものである。つまりここでは、『万葉集』歌との「対話（解釈）」を通じて読み取った詠み手の思い（「生駒山を隠さないでほしい」）を、『伊勢物語』の万葉類歌は直接言語化する形で表現している。

次に、「A 『万葉集』歌の詠歌内容を新たな語彙を用いて言明し、再表現を図ったもの」に分類したもののうち、19番を取り上げる。

19

人知れず我恋ひ死なばあぢきなくいつれの神になき名おほせむ
（89段）

和伎毛古尔 安我古非思奈婆 曾和敏可毛 加未尔於保世牟

己許呂思良受互

（我妹子に我が恋ひ死なばそわへかも神に負ほせむ心知らずて）

『万葉集』卷十四・三五六六・作者未詳

『万葉集』歌に表現されている思いというのは、「自分が恋い焦がれて死んでしまったなら、その原因であるあなたは、それを神のせいだというのだろうか、私の心の内も知らないで（そうなってしまったら情けない）」という嘆きである。その嘆きを、『伊勢物語』の万葉類歌は、『万葉集』歌結句の「心知らずて」を「人知れず」に変えて初句に措き、「そわへかも」を「あぢきなく」の形容詞一語に変換することで、端的に表現する。つまり、『万葉集』歌に表明される心情

は「あぢきなし」として解釈され、『伊勢物語』万葉類歌はこの一語に『万葉集』歌の詠歌内容を集約する形で再表現していくのである。

次に、「B 新たな表現を加えることで『万葉集』歌にない新たな表現内容を生みだしているもの」に分類されるものうち、20番を取り上げる。

20

須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
（112段）

之加乃白水郎之 焼塩煙 風乎疾 立者不上 山尔軽引

（志賀の海人の塩焼く煙風を疾み立ちは上らず山にたなびく）

『万葉集』卷七・一二四六・古集・作者未詳

『万葉集』歌は、「羈旅の歌」として、風が激しく吹くために、煙がまっすぐには立ち上らず山にたなびく様子を叙景歌的に詠んでいる。一方『伊勢物語』は、「思はぬ方に」を新たに加えることで、叙情歌への展開を図っている。ここでは、『万葉集』歌の風景は譬喩となり、煙は恋人を、風はその懸想人を表象して、「ことさま」の官能的な視覚化をうながすものとなる。

最後に、「C 『万葉集』歌の表現内容を充分理解した上で、歌の一部を改訂して、より深い叙情の開拓を図っているもの」に分類されるものうち、8番を取り上げる。

8

玉の緒をあはおによりて結べれば絶えての後も逢はむとぞ思
（35段）

玉緒乎 沫緒二搓而 結有者 在手後二毛 不相在目八方

（玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめやも）

両歌第四句、『万葉集』は、「結べらば」とする。これに従えば仮定条件を表すことになり、「結んだならば、この後にも逢えないことがありましようか」と、詠者紀郎女が若き家持としつかりとした関係を取り結ばなかったことへの後悔、また、今後の関係への不安を表明した歌となる。これに対して『伊勢物語』は、「結べれば」として確定条件で歌う。ここでは、関係の絶えた後にも、「かつて契りを結んだので、仲の途絶えた後でも逢おうと思うのだ」と、「結んだ」という事実がすがって、あきらめきれない思いが表現される。関係を修復できない現実をそれとしてわかっているながらも、逢瀬の記憶を消すことができないまま、依然として心に抱いている相手への思いというものを、助動詞「り」を未然形から已然形に改めることで新たに展開し、『万葉集』歌とは異なる叙情が新たに生成しているといえる。

以上、『伊勢物語』の万葉類歌には、これら四事例のような、『万葉集』歌と対話するなかで、様々な形で原歌を改変し、新たな表現を目指したものが含まれているのである。

五 『古今集』の万葉類歌

これまで、『伊勢物語』の作品中の万葉類歌を三つの観点（同類・同想歌、上代修辞技法を継承・展開させた歌、万葉集との対話・変奏）に分類して考察してきた。これらが『伊勢物語』成立時（初期段階の成立は九世紀後半）の「万葉類歌」一般の在り様と重なることは、『古今集』所収の万葉類歌がほぼ同様の様相を呈していることから説明できる。それぞれに分類した『古今集』の万葉類歌五首を該当する万葉歌とともに以下に示す。

「I 同類・同想歌」のCに分類されるもの

① 君こずは寝屋へもいらじ濃紫わが元結に霜はおくとも

『古今集』卷第十四 恋歌四 六九三 よみ人しらず

在管裳 君乎者将待 打靡 吾黒髪尔 霜乃置萬代日

（ありつつも君をば待たむうち靡く我が黒髪に霜の置くまでに）

『万葉集』卷第二 八七 作者未詳

「II 上代修辞技法を継承・展開させた歌」に分類されるもの

② 須磨のあまの塩やき衣をさをあらみまどほにあれや君が来まさぬ

『古今集』卷第十五 恋歌五 七五八 よみ人しらず

須麻乃海人之 塩焼衣乃 藤服 間遠之有者 未著穢

（須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず）

『万葉集』卷第三 四一三 大綱公人主

③ 有磯海の浜のまさごと頼めしは忘るゝ事のかずにぞ有りける

『古今集』卷第十五 恋歌五 八一八 よみ人しらず

八百日往 濱之沙毛 吾恋二 豈不益歟 奥嶋守

（八百日行く浜の真砂も我が恋にあにまさらじか沖つ島守）

『万葉集』卷第四 五九六 笠郎女

「III 万葉歌との対話・変奏歌」のCに分類されるもの

④ 月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふににたり待たずしもあらず

『古今集』卷第十四 恋歌四 六九二 よみ人しらず

我屋戸之 梅咲有跡 告遣者 来云似有 散去十方吉

（我がやどの梅咲きたりと告げ遣らば来と言ふに似たり散りぬともよし）

⑤ 下にのみ恋ふればくるし玉の緒の絶えてみだれむ人などがめそ

『古今集』巻第十三 恋歌三 六六七 友則

生緒尔 念者苦 玉緒乃 絶天乱名 知者知友

(息の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れ知らば知るとも)

『万葉集』巻第十一 二七八八 作者未詳

例えば、「I 同類・同想歌」の「C 一見すると全く異なる歌に見えながらも、いくつかの共通するキーワードによって一首が構成され、その結果、詠歌内容も同想のものとなっているもの」に分類できる『古今集』巻第十四・六九三番(①)の歌は、『古今集』歌と『万葉集』歌は一見すると全く違う歌に見えるが、『古今集』の「寝屋へもいらじ」と「わが元結」に、『万葉集』の「君をば待たむ」と「我が黒髪」が対応し、同義である。つまりこの二首は、これらのキーワードでつながりながら、『古今集』に詠まれている「君こずは寝屋へもいらじ」という強い思いと、『万葉集』に詠まれている「ありつつも君をば待たむ」という直接的な思いを主に、どちらも「元結」そして「黒髪」に「霜が置」くほどに、「あなたが来てくれるまでずっと待ち続けよう」とする同様の心の働きを表現している。

「II 上代修辞技巧を継承・展開させた歌」に分類した『古今集』巻第十五・八一八番(③)については、両者に共通する「浜の真砂」という語に関して、『日本国語大辞典』によると「浜辺の砂。数が多くて数えきれないところから、無数・無限であることのたとえにいう。」とある。この言葉の用いられ方として、『古今集』では、「有磯海の砂が数えられないほど多いように、二人の恋は尽きることがないと私

を信用させたけれど、砂が無数なのは私を忘れる回数なのでした」と、「恋の無限さ」を表現しつつも、それは「裏切られる回数」であったと述べる。一方『万葉集』では、「八百日行く」とつながるため「八百日もかかるほどに広い浜でさえも」というように、「空間的・時間的な広さ」を表現している。つまりここでは、『万葉集』で用いられている「浜の真砂」という言葉を『古今集』においても用いており、表相的には同義に思えるような体裁ではあるが、空間的な広さを表現している『万葉集』に対し、『古今集』では「恋の無限さ」や「裏切られる回数」の意で用いることで、別物として詠んでいる。

「III 万葉歌との対話・変奏歌」に分類した『古今集』巻第十四・六九二番(④)に関して、『万葉集』歌と『古今集』歌はどちらも、思いを寄せる人に直接「来てほしい」と伝えるのではなく、『万葉集』歌では「我がやどの梅咲きたり」、「古今集」歌では「月夜よし夜よし」として、それをその人に「告げ遣らば」、それは「来と言ふに似たり」というように、間接的に思いを伝えるという手段を歌に詠み込み表現している。このように、第四句目までの発想は類似するが、第五句目に注目してみると、『万葉集』歌では、「散りぬともよし(あなたに逢えることができれば散ってもかまわない)」と、直接的でありながら、半ば投げやりに思いを述べているのに対し、『古今集』では、「待たずしもあらず(待っていないわけではない)」と、少し遠まわしに距離を置いて表現する。そしてそこに表現されるのは、知らないうちに自分も「待つ」ということをしていたのか、という詠者自身の思いの発見なのである。つまりここでは、『万葉集』歌で詠み込まれている「(思いを寄せる相手に)来てほしい」というその思いは『古今集』にも共通してあるが、第五句目をこのように変えることによって、『万葉集』では表現されていない「詠者が改めて自身の思い

を確認する（再発見する）」という心の働きを、少し複雑に表現することができているといえ、それは、『万葉集』歌との対話を通して深い叙情を開拓しているといえる。

このように、『古今集』に収載される万葉類歌はすべて『伊勢物語』中の万葉類歌と同様に分類することができる。そして、『伊勢物語』とその同時代的位位置にある『古今集』の万葉類歌が、『伊勢物語』の万葉類歌と同様の様相を呈している点から、『伊勢物語』成立時（初期段階の成立は九世紀後半）の「万葉類歌」一般の在り様と重なることが説明できる。

六 おわりに

以上、『伊勢物語』成立の言語文化環境をうかがうために、作品中の万葉類歌を分析した。そこからは、『万葉集』の歌と同類・同想関係にある万葉類歌、それとは逆に、『万葉集』以来の序詞・歌詞・譬喩を踏襲しつつも『万葉集』歌とは異なる詠歌内容を持つ万葉類歌（そこには、『古今集』との連接が確かめられるものがある）、さらには、『万葉集』歌との対話を経て表現内容の言語化、再表現、拡充、開拓を試みた万葉類歌もあった。また、このような『伊勢物語』の万葉類歌が、これ以外の万葉類歌一般の在り様と重なることは、先に示したように『古今集』中の万葉類歌の考察によって明らかになった。

このようにして、『伊勢物語』中の万葉類歌は『伊勢物語』成立時の言語文化環境を伝えるものとしてすることができる。それは上代の色合いを濃く残し継承しながら、そこを基盤に新たな表現の開拓も少しずつ試みられていった時代だった。『伊勢物語』もそうした言語文化環境の中で生成していったのである。

万葉類歌一般の在り方については、『古今和歌六帖』との関係を見

ていく必要があるが、それについては今後の課題としたい。

注

*1 『歌物語（伊勢物語・平中物語・大和物語）総合語彙索引』（西端幸雄・木村雅則 共編）【索引の底本】三条西家旧蔵本（学習院大学所蔵『伊勢物語』 天福本系統）

※*2～*8 に関しては、それぞれの語誌・活用形・意味用法・用例等を記載している。（参考：『角川古語大辞典』・『日本国語大辞典』）

*2 かくろふ【隠】四段↓下二段

ハ行四段活用後に、全体として下二段活用に転じた。『角川古語大辞典』

○万葉集「雲間より渡らふ月の惜しけども隠ろひくれば」（三一七）

○伊勢物語「きのふけふ雲の立ち舞ひかくろふは花の林を憂しとなりけり」（67段）

○源氏物語「中納言はかくろへたる方に入り給ひて」（総角）

*3 わする【忘】四段↓下二段

四段活用は古形。中古になると「わすらる」という受身・自発の助動詞が付いた形でだけ残る。また、四段活用の場合には意識的に忘れる、思い切る思い出さないようにする意で、下二段活用の場合の、自然に忘れる、記憶が薄れてゆく意と対応するとも説かれる。（『日本国語大辞典』）

○万葉集「わすらむて野行き山行き我れ来れど我が父母は忘れせぬかも」（四三四四）

（四三四四）

○伊勢物語「離るとも思ほえなくに忘らるる時しなければおもかけに立つ」（46段）

○古今集「わびぬれば強ひて忘れむと思へども夢といふものぞ人のだめなる」

*4 く【消】下二段

上代には、「きゆ」はまれで、「く」が用いられたが、平安時代以後は雪消(ゆきげ)などの名詞形以外はほとんど用いられない。『日本国語大辞典』

○万葉集「立山の雪しくらしも延槻の川の渡瀬燈浸かすも」(四〇二四)

「たちまちに心消失せぬ」(二四七〇)

「降り置ける雪の常夏にけずて渡るは」(四〇〇四)

○伊勢物語「白露は消なば消なん消えずとて玉にぬくべき人もあらじを」(105段)

*5 ひつ【漬】四段↓上二段(平安以降四段↓下二段)

活用の種類について、自動詞の四段活用が上二段活用に転じたのは、平安中期以後といわれている。連用形は四段活用か上二段活用か確定できないが、中古以降の例は便宜上二段活用に含めた。『日本国語大辞典』

○万葉集「相思はぬ人をやもとな白たへの袖漬(つ)までに哭(な)のみし泣(な)かも」(六一四)

○伊勢物語「つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしものし」(107段)

「あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流ると聞かば頼まむ」(107段)

○源順集「おりたてば裏までひつる袂故何うち返す荒田なるらむ」

*6 かたらふ【語】 『日本国語大辞典』—(2)

(1)連語(動詞「かたる(語)」の未然形に反復・継続を表わす助動詞「ふ」の付いたもの)語りつづける。繰り返し話をする。

○万葉集「鴉鳥の二人並び居かたらひし心そむきて家離りいます」(七九四)

○伊勢物語「思ひわびて、ねむごろに相かたらひける友だちのもとに」(16段)

(2)「他ワ五(ハ四)」親しく交際する。

*7 こととふ【言問】 『日本国語大辞典』—(3)

(1)ものをいう。口をきく。

○万葉集「こととはぬ物にはあれど吾妹子が入りにし山をよすかと思ふ」(四八一)

○伊勢物語「名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(9段)

(2)話をする。ことばをかける。また、愛のことばをかわす。

○万葉集「夕さればもの思ひまさる見し人の言問姿面影にして」(六〇二)

(3)たずねる。質問する。

※*6「かたらふ」・*7「こととふ」に関して、辞書名の下に示す番号は、その辞書がもともと示していた意味用法であり、ここでは『伊勢物語』の用例を、辞書が示すものとは別に、私に認定している。

*8 ほど【程】 『日本国語大辞典』—(1)

おおよその程度を表わす名詞「ほど」は、本来は専ら時間的程度を表わすものであったが、奈良末・平安初期には空間的程度をも表わすようになり、平安中期の「土左日記」「竹取物語」あたりからは、さらに人事に関する事柄の程度や事物の程度をも表わすようになった。

(1)時間的な程度を表わす。

(イ)すぎて行く時の間。

○万葉集「青波に袖さへぬれて漕ぐ舟のかし振るほどにさ夜ふけなむか」(四三二二)

(ロ)時分。ころ。

○伊勢物語「宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて」(60段)

(2)空間的な程度を表わす。

○古今和歌集「わかれてはほどをへだつとおもへばやかつみながらにか
ねてこひしき」(離別・三七二)

○源氏物語「みちの程も、よもの浦々みわたし給て(略)こひしき人の
御事を、思ひ出き(え給に)」(明石)

○源氏物語「よものこず多そはかとなうけぶりわたれるほど、絵にい
とよくも似たるかな」(若紫)

*9 「伊勢物語における万葉類歌—その典拠と採用の方法—」(『講座 平
安文学論究』第十四輯 一九九九年十月三十一日)

*10 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』(研究編)(岡山書店刊 一九三八
年) 597頁～602頁

*11 福田良輔「伊勢物語の民謡性—萬葉集・古今集・神楽歌・催馬楽を中
心として—」(『国語国文』六卷一号 一九三六年一月)

*12 「君があたり」に対応する万葉集三〇三二番の原文
「君之當 見乍母将居 伊駒山 雲莫蒙 雨者雖零」(君があたり 見つ
つををらむ 生駒山 雲なたなびき 雨は降るとも)

*13 金井清一「伊勢物語における万葉歌」(『関東学院短大論叢』第二十八集
一九六六年六月)

*14 針本正行「伊勢物語に採られた万葉類歌(二) —二十三段を中心として
—」(『国文学研究稿』二号 一九八一年二月)

*15 ①日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』②日本古典文学大系『竹取物語
・伊勢物語・大和物語』③新日本古典文学大系『竹取物語・伊勢物語』④

福田良輔「伊勢物語の民謡性—万葉集・古今集・神楽歌・催馬楽を中心
として—」

*16 池田亀鑑氏の『伊勢物語に就きての研究』には、定家本伊勢物語以外の
異本系に、この他五首の万葉類歌が指摘してあるが、今回は取り上げな
いこととする。

*17 「まねみ」は「まねし」(度数が多い・度重なる)に、上代特殊仮名づ

かいであ「み」(ゝなので)がついたもの。(『日本国語大辞典』)

本文・和歌引用

『新編国歌大観 CD-ROM版 Ver.2』 角川学芸出版

『竹取物語・伊勢物語』新日本古典文学大系 岩波書店

『竹取物語・伊勢物語・大和物語』日本古典文学大系

『竹取物語・伊勢物語』日本古典全書 朝日新聞社

『萬葉集一～四』新日本古典文学大系 岩波書店

『萬葉集一～五』新潮日本古典集成 新潮社版

『古今和歌集』新日本古典文学大系 岩波書店

『後撰和歌集』新日本古典文学大系 岩波書店

(大分県立大分鶴崎高等学校)